

ウエマツ シゲオ

植松 茂男

文化学部・教授

文学士／大阪大学

M.A./Columbia University

Ed.D./Temple University

主な研究業績

【著書】

- 共著『第二言語習得(SLA研究と外国語教育)』[大修館英語教育学大系](大修館書店、2011年、第6章1.「学習者要因」1.「年齢」(pp.176-186).
- 単著 “The Long-term Effectiveness of English Language Instruction at Japanese Elementary Schools” Ann Arbor MI, UMI/Proquest, 2010.
- 共編著 “22 Essays in English Studies ; Language, Literature, and Education” *Shohakusha*, 2007.
- 単著『英語学習と臨界期』(松柏社 2006年10月)
- 共編著『英語指導のスキル』(日本書籍、2001年)
- 共著『アメリカの蔑視語』(明石書店、1994年)

【論文】

- 『英語活動の効果について—英語習熟度テストとアンケートを利用した予備的調査分析』(共著) *JES Journal* Vol. 13 (2013年), pp. 68-83.
- “The Effect of English Learning in Elementary School on Students’ English Language Development in Junior High Schools.” *THE JOURNAL OF ASIA TEFL* Vo.9(4). (2012), pp. 113-133.
- 『バイリンガルであること』教育と医学 (2011年)第59巻4号 慶応大学出版会、pp.39-47.
- 『特区における小学校英語活動の長期的効果の研究』京都産業大学 教職研究紀要 第6号 (2011年)、pp.19-42.
- “The Effect of English Learning in Elementary Schools on Students’ English Language Skills and Their Affective Variables in Junior High Schools.” *Jacet Journal* (2010), 50, pp. 49-62.
- 「早期英語学習がその後の英語技能に与える影響について—学校間差、性差、英語塾経験等の考察—」 *SJEE (Setsunan Journal of English Education)*, (2010), Vo4, pp. 105-117.
- “Long-term Effectiveness of English Language Learning in Elementary Schools.” *Journal of the Japan Association for Developmental Education* (2009), 4 (1), pp. 108-115.
- 「台湾の小学校英語教育の現状と課題」 *SJEE (Setsunan Journal of English Education)* Vol.2 (2008年) pp.167-183.
- “Rethinking the Second Language Learner’s Identity Development” In K. Tanaka, M. Shishido, & S. Uematsu (2007, eds.) *22 Essays in English Studies - Language, Literature, and Education*, pp.413-428.
- 「DVD映画教材利用時の英語字幕が英語学習に与える影響について」独立行政法人メディア教育開発センター紀要「メディア教育研究 Vol.1 (2004年) pp.107-114. など。

ホームページURL

<http://uematsu-shigeo.net/>

研究テーマ

言語習得論:ことばの習得と臨界期との関係を探る

概要

「大学に入るまで6年間も英語をやってきたのにききとりが苦手」とか、「英語が話せない」という話をよく聞きます。これには大きな理由が二つ考えられます。英語の授業といっても中高では語彙・文法・読解に重点がおかれているために、日本語を使った説明が多いのではないかと思います。また、母語である日本語でも思春期を超えてから接すると、なかなかその方言独特の言い回しやアクセントの克服が容易ではありません。

そもそもことばを理解することやものを見るなど「生きてゆくために」必要な能力は、新生児の脳の発達に合わせて、刺激さえ十分与えられれば自動的に身につくようになっていくようです。このような特定能力の発達を可能にさせるタイムリミットが「臨界期」(critical period)です。自然界の鳥などの動物(数時間から数日程度)と異なり、ヒトの「ことばによるコミュニケーション」能力獲得の場合はもっと長く、何年もかかります。「ことば」自体が複雑なためと、ヒトの成長には時間がかかるためだと考えられています。それでも、一定の年齢(思春期前後といわれています)を超えると新たな外国語や方言が、思うように習得できなくなります。英語で言えば特にリスニングとスピーキングでその傾向が顕著ではないでしょうか。

逆に、幼少期を英語圏ですごした人の中に、まるで英語母語話者のような発音や聞き取りをする人がいます。しかし、同じように幼少期を英語圏で過ごしても、そうでない人も沢山います。数としてはこちらの方が圧倒的に多いと思います。私はかつて帰国子女の学校で教えていた時に、同じ経験をしてどうしてここまで人によって違うのだろう、と不思議に思いました。それが今日に至る研究のテーマになっています。

応用分野

量的研究と質的研究:上記のテーマを研究するには、リサーチ結果を双方で検証しないと、断定的で浅い理解にとどまった結論を出す危険性があります。量的研究(統計)と共に質的研究(エスノグラフィーやインタビュー、授業観察等)から得られたデータの分析が大変重要だと感じています。

早期英語教育:小学校英語教育の効果に注目しています。言語スキルとアティテュード両面でどのような影響があるのか検証してゆきたいと思っています。

共同研究へのニーズ

上記のテーマに関して、脳科学研究、統計(Rasch, SEM等)、応用言語学方面で共同研究をして下さる方を探しています。